IEEJ：2024 年 7 月掲載　禁無断転載
特別速報レポート

国際エネルギー情勢を見る目（696）　2024 年 7 月 5 日

EI 統計に見る、2023 年の国際エネルギー情勢（2）：エネルギー生産・輸出動向

一般財団法人　日本エネルギー経済研究所
専務理事　首席研究員
小山　堅

前回の「国際エネルギー情勢を見る目（695 号）」に続き、今回の小論では、EI Statistical Review of World Energy 2024（以下、EI 統計）に基づいて、2023 年の国際エネルギー市場の注目すべきポイントをまとめる。今回は、国際エネルギー市場の需給バランスを映す鏡であるエネルギー価格の動向を整理した後、石油、天然ガス・LNG、石炭について、生産及び輸出動向を整理する。

まず、国際エネルギー市場を見る上で最も重要であり、常にその動向が注目の的となる原油価格だが、EI 統計では、2023 年のブレント原油のスポット価格平均は 82.64 ドル／バレルであった。前年の 101.32 ドルからは 20 ドル近くの低下となっており、ウクライナ危機の発生後にリーマンショック後の最高値を付けた原油価格が通年でも 100 ドル超となった 2022 年から、2023 年は市場が一定の落ち着きを取り戻したということになる。しかし、年間平均 80 ドル超という原油価格は決して安値ではない。2015 年以降で見ても、100 ドル超となった 2022 年を除けば最も高い原油価格を記録した年であった。

天然ガスについては、世界の主要市場で価格動向・水準に差異があるが、ウクライナ危機で最も重大な影響を被った欧州市場の TTF 価格は、2023 年は 100 万 BTU 当たり 12.87 ドルと、前年の 37.09 ドルから約 3 分の 1 にまで低下した。しかし、この価格水準も 2022 年と 2021 年を除けば、同市場での最高値水準となっている。2022 年の尋常ならざる危機状況と比べれば市場は落ち着いたものの、欧州ガス価格は高水準を維持した、ということになる。この点は石炭でも同様であり、EI 統計の北西欧州価格は 2023 年には 129.54 ドル／トンと、前年の 291.28 ドルから半分以下となったが、2022 年を除けば最高値水準であった。ウクライナ危機を踏まえた異常な水準からの回復途上にあったとはいえ、2023 年は引き続き国際エネルギー価格は高止まり状況にあったと言えよう。こうした価格状況と深く関係を持つ供給動向を、石油、天然ガス・LNG、石炭について順次見ていくこととする。

まず石油については、2023 年の世界の生産量は前年比 2.0%増の 9,626 万 B/D となった。同年の世界の石油需要の伸びは 2%強であり、需要の伸びに合わせて供給も拡大しているが、前年からの価格下落に対応した主要産油国グループの需給調整が顕在化した年でもあった。同年の非 OPEC 生産は前年比 3.4%増の 6,221 万 B/D となったのに対し、OPEC 生産は前年比 0.6%減の 3,405 万 B/D に減少した。また、非 OPEC の中でも、OPEC プラスグループに参加するロシアの生産は、前年比 1.1%減の 1,108 万 B/D となった。こうした中、非 OPEC の、ひいては世界の石油生産増加の牽引役となったのが米国である。2023 年の米国の石油生産は、前年比 8.5%増の 1,936 万 B/D となった。米国の同年の増産量（前年比）は 151 万 B/D に達し、世界の石油増産分の 82%に相当した。逆に米国を中心とした非 OPEC の増産に対応して減産を実施・強化した OPEC の中心がサウジアラビアであった。2023 年のサウジアラビアの石油生産量は前年比 6.6%減の 1,139 万 B/D であった。こうして、世界の石油生産上位 3 か国、米国（シェア 20.1%）、サウジアラビア（同 11.8%）、ロシア（同 11.5%）は、それぞれ、大幅増産、大幅減産、微減と 3 者 3 様の生産動向を示した。

また、2023 年の世界の石油輸出は 6,812 万 B/D と、前年比 0.4%の微減となった。こち

らも、米国は大幅（前年比 6.5%）増、に対して、サウジアラビアとロシアは大幅（各々、同 5.5%、13.9%）減、と対照的な輸出動向を示している。地域別に見ると中東の石油輸出が 2,330 万 B/D と 2023 年の世界の石油輸出の 34%を占め最大となったが、国別上位 3 か国（米国、サウジアラビア、ロシア）の輸出量の合計はそれを若干上回る 2,413 万 B/D で世界シェアは 35%であった。ちなみに、米国は 911 万 B/D と最大の石油輸出国ではあったが、同時に 854 万 B/D の石油輸入も行っている。その点、米国の純輸出量は約 60 万 B/D 程度であり、サウジアラビアやロシアのような巨大な純輸出国とは異なる状況にある。

2023 年の世界のガス生産は、前年比 0.3%増の 4,059BCM（10 億立米）の微増になった。同年の世界のガス需要がほぼ横ばいとなったことに合わせて、生産も同様の趨勢を示している。しかし地域別に見ると、生産の増減に大きな差異・特徴が現れている。世界最大のガス生産国である米国の 2023 年の生産量は、前年比 4.2%の堅調な増加で 1,035BCM となった。米国生産の世界シェアは 26%に達している。米国のガス生産は、2005 年の 489BCM から、コロナ禍の影響で減少した 2020 年を除き 20 年以上にわたって増産が続き、2023 年には 2005 年の倍以上にまで拡大している。シェール革命の凄まじいばかりの成果である。他方、世界 2 位のガス生産国、ロシアの 2023 年のガス生産は前年比 5.2%の大幅減で 586BCM に低下した。ウクライナ危機発生以降、欧州向けのガスパイプライン供給が激減しているが、それがロシアの生産そのものを大きく低下させることに繋がっている。その他、米国に牽引される形になってはいるが、カナダ・メキシコのガス生産も拡大し、北米のガス生産は前年比 4.1%の拡大となった。一方、ロシアの減産もあり、旧ソ連地域のガス生産は全体で 4.2%の減少を示したことに加え、ノルウェーの減産などのため欧州のガス生産も前年比 7.2%の大幅減となるなど、地域別ガス生産動向はまだら模様となった。

この状況の下、世界のガス輸出にも大きな変化が見られた。2023 年の地域間パイプラインガス貿易量は前年比 8.3%の大幅減で 388BCM となった。一方、LNG 貿易は 1.7%増で 549BCM となり、対照的な動きを示した。全体のガス貿易に占める LNG のシェアは 59%にまで高まり、今や世界のガス貿易の主体が LNG となっている。かつてパイプラインガスがガス貿易の主体であったが、2020 年に LNG が主体の地位を取って代わり、以降もシェア拡大を続けている。2023 年の変化をもたらした最大の要因の一つがロシアのパイプラインガス輸出の激減である。2021 年時点では、世界のガス輸出の 20%を占めていたロシアのパイプライン輸出は、ウクライナ危機発生後に急速・大幅に低下し、2021 年の 201BCM から 2022 年 125BCM、2023 年 95BCM へと一気に低下した。中でも欧州向けパイプラン輸出は、2021 年 168BCM から 2023 年には 50BCM まで激減している。この大幅低下が 2022 年の欧州ガス危機をもたらす直接の原因となったが、これを欧州向けガス供給の面で補ったのが米国 LNG 輸出の増大である。米国の 2023 年の LNG 輸出は前年比 9.4%増の 114BCM となった。2021 年からの輸出の増分は 20BCM と極めて大きな伸びを示したが、もちろん、これだけでは上述のロシアの欧州向けパイプラインガス輸出の減少分を補うことはできない。しかし仕向け地柔軟性の高い米国 LNG は、輸出量の純増以上に既存契約からの欧州向けへの仕向け地変更分も含め、欧州のガス需要を最大限満たす役割を果たした。主要な LNG 輸出国の中では、2023 年にはアルジェリアなども輸出増となったが、米国の輸出拡大は圧倒的であり、2023 年には米国は世界最大の LNG 輸出国となった。

2023 年の世界の石炭生産は、前年比 3.1%増の 91.0 億トンとなった。安定供給と手頃なエネルギー価格の重要性がクローズアップされる中、石炭消費も拡大し、それに見合う形で石炭生産も拡大した。世界の石炭生産の 52%シェアを占める中国で前年比 3.3%の増産、同 11%シェアを占めるインドで前年比 11.0%の大幅増産となったことが石炭増産の象徴である。世界 1 位の石炭輸出国インドネシアの 2023 年の輸出は前年比 8.8%増、第 2 の輸出国オーストラリアも前年比 9.6%増と堅調な輸出拡大を示した。なお西側の禁輸対象となっているロシアの石炭輸出（第 3 位）も 2023 年には前年比 1.4%の微増となった。

以上

お問い合わせ：report@tky.ieej.or.jp